フッケバインファミリー？　いいえ、零崎一賊です

黒い鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フッケバインファミリー？　いいえ、零崎一賊です

【Ｎコード】
Ｎ３３９３Ｚ

【作者名】
黒い鳥

【あらすじ】
これは傑作しか存在しない、戯言な世界で死んだ者が【魔法少女リリカルなのは】の世界に転生する物語。
最初から原作の設定に改竄しながらも面白おかしく全てを台無しにしていく物語である。

（前書き）

色々と無理矢理感が否めない作品です。

少年は、死んでしまった。
どこにでもあるような死に方をして、そして――何故か異空間に存在していた。

「……あれ？」

確かに自分は死んだはずだ、と思いながらも状況を確認しようとする。
周りは白色の光景だけだ。逆に、白色以外存在していない。目が悪くなりそうなほど、白色だけだ。
床や天井、壁が見えないので……空中浮遊している感覚に陥るが、ちゃんと足は地面についている感触はあるので、凄く気持ち悪い。
ふむ、と考える仕草を数秒して、放棄した。
ま、どうでも良いか、と言う結論に至ったのだ。

「いやいや、どうでも良くないだろ」

そんな声が背後から聞こえたので、振り向く。
そこには蒼髪蒼眼の高校生ぐらいの少年が存在していた。
そして、一目見てわかった。

――あぁ、彼は神だと。

よく二次創作で神を馬鹿にしたような態度をとる死者が多いが、目の前の存在は馬鹿にする事が出来ないであろう。それほどまでに、存在感があった。
もっとも、神だと理解しても、信仰はしないけど。

「貴方は？」
「種族は神。階級は上の方の。……名前は月影（つきかげ）だ」
思ったよりも神の名前は普通だった。
「お前には転生する資格がある。理由は聞くな」
「転生？　あぁ。虫とかにですか？」
輪廻転生――生物は永遠と生と死（うまれかわる）を繰り返す。
そして現世で人間を体験した僕は、次は別の生物になるのであろう。
出来れば、女性には生まれたくない。
「いや、そもそも輪廻転生なんて概念は人間が作り出（かんがえ）したものだ。
生き物は死んだら、それまでさ」
恐ろしい事を言ってくれる。
死んだら無に帰す。ただそれだけだと言われた。
「……ん？　じゃあ、何で僕はここに居るんですか？」
「オレがこの空間に召喚したからだ。先程も言った通り、お前には
転生する資格があるからだ。……あぁ、来世も人間だから安心しろ。
前世と姿性別才能頭脳同じだから」
「そうですか。……何故、転生する資格があるんですか？」
「理由は答えられない」
「そうですか」
理由不明。
人間如きが神の事など理解できない。

「さて……じゃあ、説明しよう。転生先は【魔法少女リリカルなのは】の世界だ」
「あぁ……魔砲の世界ね」
「転生者として特典は三つ。さぁ、考えろ」
そう言われたので、少し考えさせてもらう。
……、よし決めた。
「第一に、『ＥＣウイルス』（エクリプス）に関してこの場で改竄させてほしい」
「……ん？　まぁ、良いが」
確か【Ｆｏｒｃｅ】のアレだろ、と呟く。
「『ＥＣウイルス』に関しての詳細。
・ＥＣウイルスの最初の発病者は僕である。
・原作に登場していたＥＣ因子適合者（ドライバー）及びＥＣ因子保有者（キャリアー）は絶対に発病しない。
・蔓延感知不能感染型病原細菌であるＥＣウイルスであるが感染したとしても完全に発病するとは限らない。
・ＥＣウイルスの特徴である自己対滅機能は排除。
・ＥＣウイルス適合者は発病者同士の位置関係などを大まかに理解できる。
・殺さなくてはいけないから、殺すんじゃない。殺さずにはいられないから、殺す。
・洗脳系は無力化できる。
これが発病者に関する内容」
「……細かいな。そしてずるいな」
呆然としている月影。
しかし、これだけは譲れない。洗脳されるなんて、ごめんだ。

「『蔓延感知不能感染型病原細菌であるＥＣウイルスであるが感染したとしても完全に発病するとは限らない。』……これに関してだが、どう言うことだ？」
「ん……つまり漠然と発病するわけではない。感染者と言えど一定の資質を持たない限り、体内でウイルスが死滅する。発病者数は……最低でも三人。最高で十人」
「了解。次は？」
「第二、発病者がリンカーコアを所持していた場合、そのまま保有。発病者でも魔法使用可能」
「……ふむ。何故？」
「魔法は魔法で、便利だし。魔法を使えないとは言え、使える資質が居たとしたら、居たで僕的には良いし」
「……わかった」

正確に言うと、原作の方では魔法を使っていないだけで本当は使えるのかもしれない。
しかしそれら全てを無視し、特典使ってまで魔法を使える状態にした。

「あ、やっぱさっきの『「ＥＣウイルス」について』の項目に【リンカーコア所持者にしか感染しない】と入れといて」
「つくづく考えるな」

しかし、特典の詳細を丁寧にしているに過ぎず、数の制限は守られているのと同じなのだ。

「最後に――――」

そう伝えると、一度頷き返答した。

「……了解した」

聞き入れてもらえて何よりだ。
そう思っていると、質問された。

「一つ、良いか？」
「どうぞ」
「お前、名前は？」

――名前、ねぇ。
神様だったら知っていると思ったが、知らないようだ。
だから、はっきりと告げた。

「零崎狂識（ぜろざきくるしき）」

どこにでも居る、しがない殺人鬼の名前さ。

（後書き）

誰でも思いつきそうな設定ですね。
殺人衝動一家……零崎っぽいよね！　みたいな。
連載するか不明。つまり、これが予告になるかすら未定。

最後の特典ですが、あえて入れませんでした。
何か殺人鬼として相応しい能力が無いか、もしくは西尾維新先生絡みの能力が無いか……とか考えていたりしましたが、結局思い浮かばずにそのまま投稿。

連載するとしたら、転生者複数となります。
そして戦いあうでしょう。

それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3393z/

フッケバインファミリー？　いいえ、零崎一賊です

2011年12月11日18時52分発行